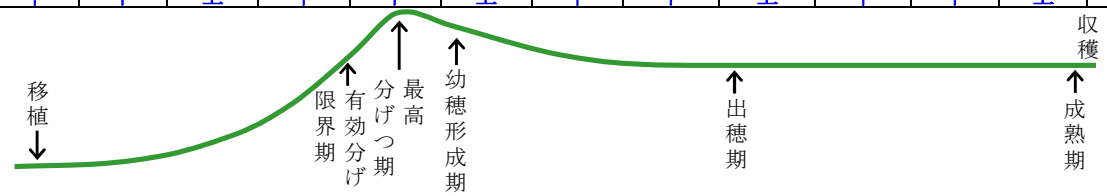
おいしくて暑さに強い 多収品種「にじのきらめき」 栽培暦

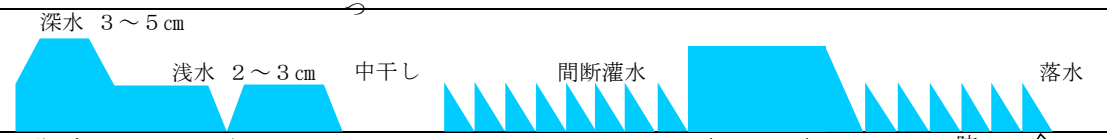
2025年３月版

月	10	11	12	1	2	3	4	5			6			7			8			9		
旬								上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下

品　種　の　特　性

1　コシヒカリと比べ出穂期は同等で成熟期はやや遅い早生品種
2　穂数・穂長のバランスのとれた「中間型」
3　草姿はやや葉まさりで、稈の太さは中、耐倒伏性はやや強
4　葉いもちの抵抗性は中、穂いもちの抵抗性はやや強、
　白葉枯病の抵抗性はやや弱、縞葉枯病は抵抗性、穂発芽性は難
5　高温登熟性はやや強、玄米は粒揃い・外観品質は良いが玄米の
　ブラウン色が濃い特性を有する。





栽培管理と留意事項

- 微量成分資材散布
- ケイ酸質資材散布
- 秋耕起
- 種子予措
- は種
- 基肥施用
- 代かき
- 移植
- 除草剤散布
- ガス抜き
- 穂肥施用
- 防除
- （追肥施用
- 防除
- 防除

・は種量は160g/箱（乾籾１３０g）。
・18箱/10a程度必要。

・代かきは均平を心がける。

・ガスが発生しやすいほ場では、２～３日落水する。

・穂肥は出穂前25日を基準とする。
・幼穂形成期に茎数が400本/㎡以下の場合は穂肥量を1.5倍にする。

・落水は収穫５日前程度、早期落水は行わない。

［育苗］
・**休眠が深いので、浸種時間は慣行品種より２日程度長くし、積算温度で<u>120℃</u>を目安とする。**
・うす播きなので均一には種する。
・苗の徒長に注意する。
・種子消毒を徹底する。
・高温にならないよう注意する。

［田植］
・栽植密度は坪当たり60株にセットする。
・極端な疎植は避ける(45株/坪以上)。
・植付け本数は3～4本/株。
・植付け深度は２～３cm程度と浅くする。

［中干し］
・茎数が株当たり23本確保されたら（移植後30～40日頃）中干しを始め、７日間程度行う。強めの中干しは青未熟粒・茶米の発生を助長する。
・中干し後は間断灌水。
・葉色を4.0以下に落とさない。

［高温対策］
・登熟期間の高温が予想される場合は、出穂前後に1Nkg/10a追肥する。

［収穫］
・本品種は止葉が穂に被さり帯緑籾が見にくいので、出穂後からの積算温度は1,100～1,250℃程度で収穫し、青未熟粒が多い場合は収穫時期を遅らせ、茶米が多い場合は収穫時期を早める。（出穂後36日～43日程度、帯緑籾歩合５～10%程度）
・露が残るときや小雨の時は避けゆっくり丁寧に刈り取る。

栽　培　目　標

１等米比率90%以上を目指そう！

項　　目	株当たり	㎡当たり
栽　植　密　度	30 cm × 18.4cm	18.1 株
最　高　茎　数	29 本	520 本
有　効　茎　歩　合	80%	80 %
穂　　数	23 本	415 本
1　穂　籾　数	72 粒	30,000 粒
登　熟　歩　合	80 %	24,000 粒
玄　米　千　粒　重	25 g	-
収　　量	-	600 kg/10 a

施　肥　基　準

	基　肥	穂肥(出穂25日前)	合　計
①体系施肥	65kg(N=7.8kg)	30kg(N= 4.2kg)	95kg(N= 12kg)
②一発施肥	60kg(N=10.8kg)	―	60kg(N=10.8kg)

※ 10ａ当たりの施用量。
※ 側条施肥は上記の数字から10～20%の減肥が可能。
※ 青未熟粒が多い場合は穂肥を削減する。

病　害　虫　防　除

時　期	病　害　虫　名
田植前（箱施用剤）	いもち病、ウンカ類 イネミズゾウムシ、ニカメイチュウ等
7月下旬（出穂前）	紋枯病、ニカメイチュウ、イネツトムシ コブノメイガ、稲こうじ病
8月上旬（出穂前後）	穂いもち、ごま葉枯病、籾枯細菌病、 カメムシ類、コブノメイガ、ウンカ類、 ツマグロヨコバイ
8月下旬	カメムシ類、ウンカ類 ツマグロヨコバイ

※ 稲こうじ病が前年に発生した圃場は防除を徹底する。